読者のページ

白書づくり奮闘中

栄区　寺岡　洋志

栄区でも、他区と同様に「よこはまふるさと白書」の作成に現在頭を悩ませている（既に刊行された区の皆さんご苦労様）。とにかくこの白書は、①区の現状がよくわかり、②読み物としておもしろく、③区民の意識を啓発し、④有償配布して売れる本、という宿命を背負った本であるため、私たちの悩みはつきない。こうした内容を満たすべく努力を、二年間続けるのである。

栄区では、作成のプロセスも重視しようと調整係を中心に各課から希望者を募り、総員一〇人のプロジェクトチームを結成し、作成にあたっている。

ふるさと白書は、区の特性に合った、独自のメッセージを区民に伝えるために、各区とも区民の関心を区政や区のまちづくりに向けようと懸命である。有償配布のため、白書に対する評価は如実かつ露骨に下される。果たして売れるのだろうか、担当の不安は尽きない。

無論我がプロジェクトチームの結成は、責任の分散が目的ではなく、編集を企画する頭の数と様々な角度から区民に接している職員の視点が必要だったからである。日常業務の合間をぬっての参加のため、作成能率の面では好ましくないかもしれないが、このように区の自主性が重んじられる楽しい（苦しい）機会に多くの職員が積極的に参加できるような体制づくりと、直接事業を担当するものの努力により、区の広聴機能は拡充していくのだと思う。

現在、そんな作業に支えられ栄区のふるさと白書づくりが進められている。白書の予告を少し。

栄区は昭和四十～五十年代に大規模に開発された郊外の住宅都市である。かつて新住民と呼ばれた若いサラリーマンが中年となり、いわゆる働き盛りの世代が中心のこのまちは、仕事や娯楽の時間を都心で過ごす人々の心地好いベットタウンとなっている。地域で過ごす主婦を中心とした層は、比較的元気だが、企業戦士達は疲れて家路につく。家庭と職場の往復で地域社会とのつながりの薄いお父さんたち、この人たちをもっとまちづくりに引き込むことができたら。白書では、この疲れ気味のお父さんに昼間のまちや人の様子を伝え、自分らのまちの事を家族と話し合えるような話題を提供して、まちづくりへの参加のきっかけとなるものを狙っている。現在、家族を通じて地域とのつながりを見いだす心暖まるホームドラマに仕立てるべく、奮闘中である。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一―二〇二九）。
この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

＜あとがき＞

横浜のまちは、その姿をめまぐるしく変えてきている。経済の成長、首都圏の人口集中などを背景として、都心部では建物が高層化、集合化し、郊外部では大小の開発があちらこちらで進んできている。

そうしたまちの変化の過程で機能性、合理性が優先されたまちがつくり出され、まちの姿が同じようになってきたのは、時代の要請だったといえるのかも知れない。

しかしその一方で、まちの画一化と平行するかのように、地域での生活が空洞化してきている。まちの変化を支えてきた交通手段の発達により、人が移動できる世界は広がったが、一人の人間として生活する世界は、せばまってしまったように思える。

交通が便利になり、社会が発達したとしても、子どもたちは毎日歩いて学校に通い、身近な環境で遊び育っていくのである。そして主婦たちは、お年寄りたちは、21世紀に向かってのキーワードが小さな地域にあふれている。

現在、そうした生活をする場を大切にした特徴あるまちづくりの試みが徐々に現われはじめている。まちの特徴は、地域離れの進んできた住民の心に、まちへの愛着を生み出し、意識させ、考えるきっかけをつくり出すことができないか。地域を考えるときに、より所となることができないか。

こんなことを考え、まちの持つ独自の特徴であり、住む人の共通の関心にもなり得る。歴史、文化、風土という要素を通して、まちの特徴づくりとその意味について特集してみた。

まちというものは、日々成長している。しかも横浜は、これから未来に向かって伸びていこうとしている都市である

それだけに、今しておかなければならないことがいっぱいあり、私たちの責任は重い。横浜が活力あふれる都市になることを願って。

＜伊藤＞